

OpenFOAM勉強会 for beginner @ 関東

「数値流体力学」輪講

～ 準備編 ～

第2回

ベクトル解析の基礎

日時: 2013年3月2日、14:10～

場所: 日本ESI@新宿

「数値流体力学」輪講に関して

目的

数値流体力学の知識(特に理論ベース)を深め、
OpenFOAMの利用に役立てること。

本輪講で学ぶもの

数値流体力学の理論や計算手法の概要。

書籍

数値流体力学【第2版】

原著： H. K. Versteeg & W. Malalasekera

共訳： 松下洋介、齋藤泰洋
青木秀之、三浦隆利

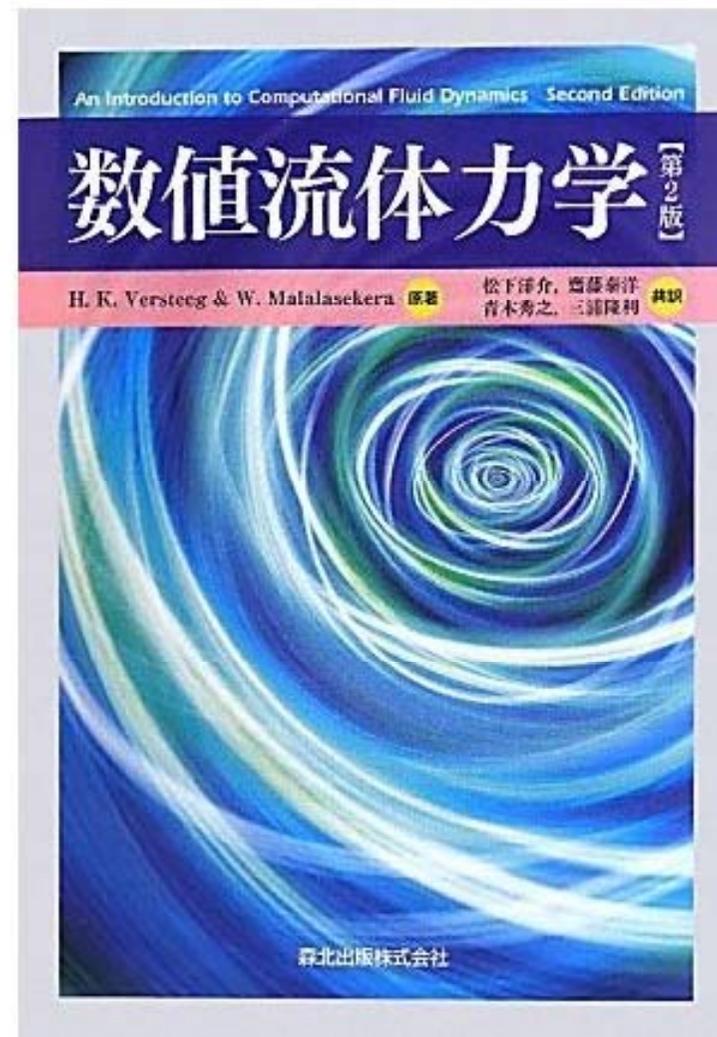
出版社： 森北出版株式会社

出版年月： 2011年7月

価格： 9975円 ← 高い…

ページ数： 544ページ ← 量が多い…

※ 有限体積法を説明した書籍(和書)の中では、最も丁寧に記述されている。



書籍の共同購入について

本書籍の購入をお勧めします

(大変恐縮ですが…)

出版元に問い合わせたところ…

- ⇒ 勉強会でのコピー使用はNG。
- ⇒ 10冊以上のまとめて購入すれば割引価格で購入(1割引?)。



共同購入したいと思います。

現在、5人程度が共同購入に名乗りを上げています。

共同購入の参加者は次回勉強会(2013.4)でフィックスします。

※ 本書籍の購入はマストではありません。

輪講では、本書籍を持っていなくても、 資料の工夫、参加しやすいように工夫していきます。→ テキスト見せ合いなど…

進め方

	日程	内容
準備編	2013年1月	微分積分の復習
	2013年3月	ベクトル解析の基礎1
	2013年4月	ベクトル解析の基礎2
本編	2013年5月～	前ページの書籍の輪講

スカラーとベクトル

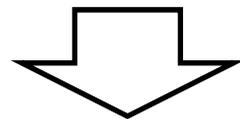
スカラー ... 大きさのみを持つ量

ベクトル ... 大きさ+方向を持つ量

スカラー量の例: 速さ、長さ、エネルギー...

ベクトル量の例: 速度、位置、加速度(力)...

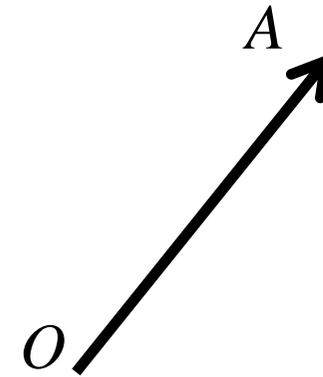
スカラー量のみのは計算は、四則演算や微積分など...
これまで学んできた解析手法がそのまま使える。



ベクトルの取扱いはちょっと違う

ベクトルの表記方法

空間上に点Oと点Aの2点があるとする。
点Oを始点、点Aを終点として、この間を
結んだ線分(有向線分)がベクトルである(右図)。



有向線分を元にしたベクトル表記: \overrightarrow{OA}

└─→ 高校での数学でのベクトルはこの表記(だったと思う)。

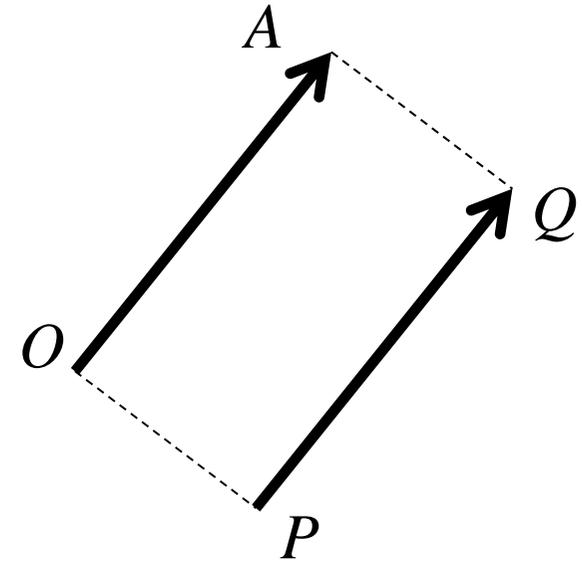
ここからは...

ベクトル量は太字のアルファベットを用いて表す

A 、 B 、 C 、 a 、 b 、 c ...など

同じベクトル

右図のように \overrightarrow{OA} とは別に \overrightarrow{PQ} があるとすると、点 P 、 Q が点 O 、 A と異なる位置にあったとしても、方向と長さが同じであれば、これらは同一のベクトルである。



$$\overrightarrow{OA} = \overrightarrow{PQ}$$

また、始点を点 A 、終点を点 O とした場合のベクトル \overrightarrow{AO} は

$$\overrightarrow{AO} = -\overrightarrow{OA} \quad (\overrightarrow{OA} \text{ の逆ベクトル})$$

と表すことができ、 $\overrightarrow{OA} = \overrightarrow{PQ}$ から、

$$\overrightarrow{AO} = -\overrightarrow{PQ}$$

が言える。

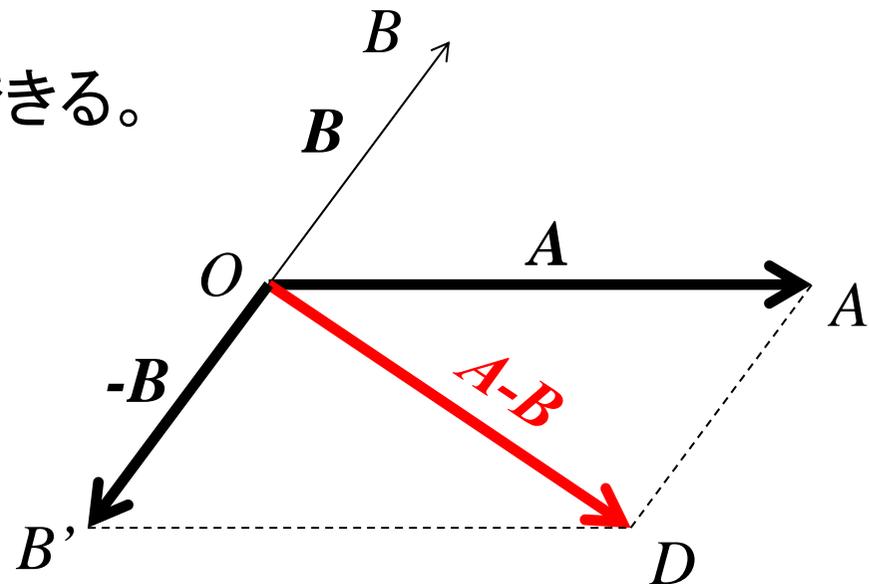
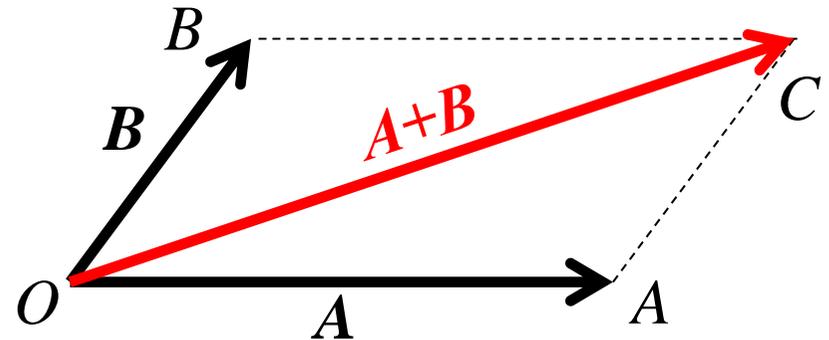
ベクトルの和、差

$\vec{OA} = A$ 、 $\vec{OB} = B$ とする。

ベクトルの演算では、 $A + B$ は、
右図の \vec{OC} に対応する(定義)



$A - B$ は、右下図のように定義できる。



ベクトル演算の公式

零ベクトル: $\mathbf{0}$... 始点と終点が同一点のベクトル



$$\mathbf{A} - \mathbf{A} = \mathbf{0}$$

ベクトルの絶対値: $|\mathbf{A}|$... ベクトル \mathbf{A} の長さを示す

単位ベクトル ... 長さ1のベクトルで、 \mathbf{A} の単位ベクトルは次のように表される。

$$\frac{\mathbf{A}}{|\mathbf{A}|}$$

ベクトルとスカラーの積 ... ほとんどの場合、通常の代数演算と対応する。

$$(a + b)\mathbf{A} = a\mathbf{A} + b\mathbf{A}$$

$$a(\mathbf{A} + \mathbf{B}) = a\mathbf{A} + a\mathbf{B}$$

$$a(b\mathbf{A}) = (ab)\mathbf{A}$$

直交座標系とベクトル

(x, y, z) の直交座標系を考え、 A の成分を見してみる(右図)。

※ ここでは O を原点とする。

A の成分 $\Rightarrow (A_x, A_y, A_z)$

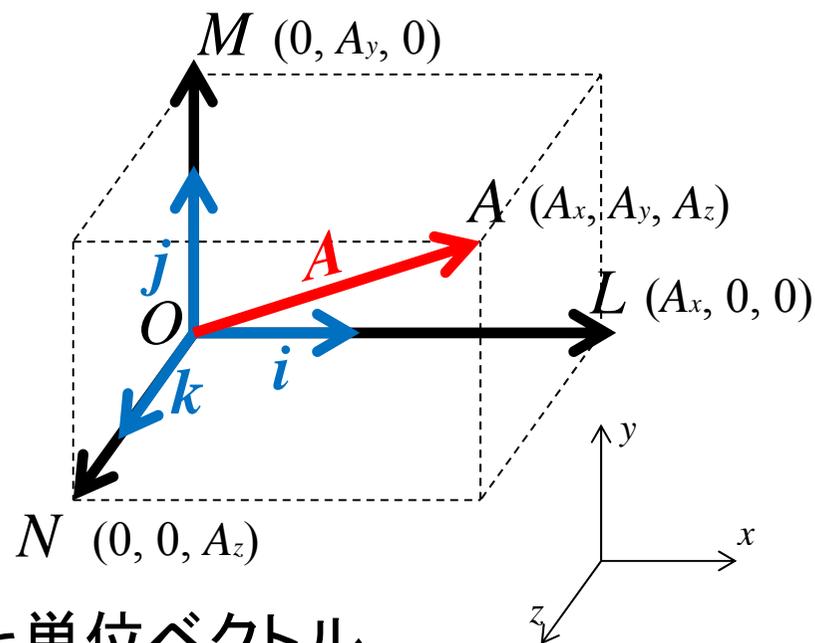
基本ベクトル

x 、 y および z 軸上に正の向きに取った単位ベクトル

\Rightarrow i 、 j 、 k とおく。

$$\begin{aligned}\overrightarrow{OL} &= A_x \mathbf{i} & \overrightarrow{OM} &= A_y \mathbf{j} & \overrightarrow{ON} &= A_z \mathbf{k} \\ \mathbf{A} = \overrightarrow{OA} &= \overrightarrow{OL} + \overrightarrow{OM} + \overrightarrow{ON}\end{aligned}$$

$$\mathbf{A} = A_x \mathbf{i} + A_y \mathbf{j} + A_z \mathbf{k}$$



ベクトルの内積(スカラー積)①

内積の表記

ベクトルAとBの内積 $\Rightarrow A \cdot B$

内積の定義

$$A \cdot B = |A| |B| \cos \theta$$

Aの成分 $\Rightarrow (A_x, A_y, A_z)$

Bの成分 $\Rightarrow (B_x, B_y, B_z)$



$$A \cdot B = A_x B_x + A_y B_y + A_z B_z$$

ベクトルの内積(スカラー積)②

内積の意味

$$\text{ベクトル}A\text{と}B\text{の角度関係} \Rightarrow \cos \theta = \frac{A \cdot B}{|A||B|}$$



$A \cdot B = 0$ で $\theta = 90^\circ$ となることから、
内積を見ることでベクトル同士の直交関係を把握しやすい。

内積の公式

$$(A + B) \cdot C = A \cdot C + B \cdot C$$

$$(\alpha A) \cdot B = \alpha A \cdot B$$

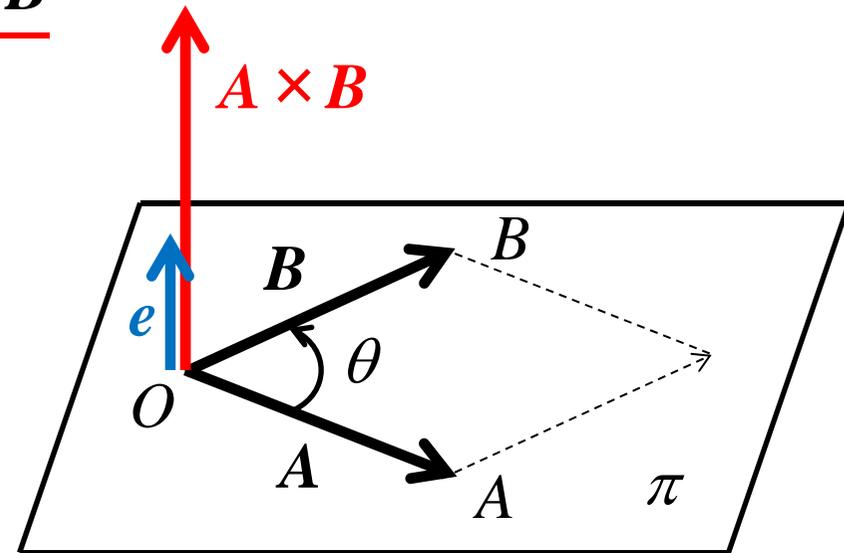
ベクトルの外積(ベクトル積)①

外積の表記

ベクトルAとBの外積 $\Rightarrow A \times B$

外積の定義

右図のようにベクトルAとBが与えられたとき、AとBを含む平面が定まり、その平面上 π において、AとBのなす角度 θ が分かる。



また、平面 π に垂直な単位ベクトルを e とする。

このとき、ベクトルAとBの外積は次のように与えられる。

$$A \times B = (|A||B|\sin \theta)e$$

ベクトルの外積(ベクトル積)②

外積の定義

$$\mathbf{A} \times \mathbf{B} = (|\mathbf{A}||\mathbf{B}|\sin \theta)\mathbf{e}$$

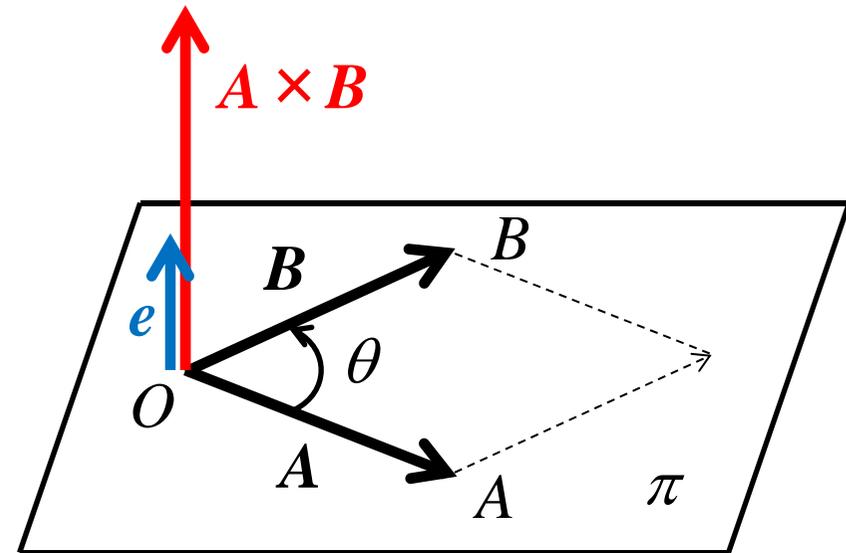
上式中の $|\mathbf{A}||\mathbf{B}|\sin \theta$ は、
右図の平行四辺形の面積に
対応する。

$$A \text{ の成分} \Rightarrow (A_x, A_y, A_z)$$

$$B \text{ の成分} \Rightarrow (B_x, B_y, B_z)$$



$$\mathbf{A} \times \mathbf{B} = \begin{vmatrix} \mathbf{i} & \mathbf{j} & \mathbf{k} \\ A_x & A_y & A_z \\ B_x & B_y & B_z \end{vmatrix}$$



ベクトルの微分

ベクトル A がある変数 t の連続な関数であるとき、 A は t に関する微分が可能です。

$$\frac{dA}{dt} \quad \longrightarrow \quad \text{ベクトル}A\text{の}t\text{に関する微係数(微ベクトル)}$$

例：変位(ベクトル量)の時間微分は速度(ベクトル量)

$$\boldsymbol{v} = \frac{d\boldsymbol{x}}{dt}$$

※ ベクトル関数の長さに関する微分も可能であるが、ここでは説明を割愛する。

スカラー場、ベクトル場

空間の各点にスカラーまたはベクトルが対応して、
点の位置の関数になっているとき、この関数が定義される
領域をスカラー場、ベクトル場と言う。

流体の場合

スカラー場： 圧力、温度、濃度・・・

ベクトル場： 流速

スカラー場の勾配

(x, y, z) の直交座標系において、スカラー場 $f(x, y, z)$ があるとする。

このスカラー場 f に対して、偏微分係数：

$$\left(\frac{\partial f}{\partial x}, \frac{\partial f}{\partial y}, \frac{\partial f}{\partial z} \right)$$

を成分とするベクトル場を作ることができる。

このベクトル場を**勾配**と呼び、 $\text{grad } f$ で表す。

$$\text{grad } f = \frac{\partial f}{\partial x} \mathbf{i} + \frac{\partial f}{\partial y} \mathbf{j} + \frac{\partial f}{\partial z} \mathbf{k}$$

※ $\mathbf{i}, \mathbf{j}, \mathbf{k}$ は x, y, z 成分の基本ベクトル

Hamiltonの演算子: ∇

$$\nabla = i \frac{\partial}{\partial x} + j \frac{\partial}{\partial y} + k \frac{\partial}{\partial z}$$

∇ は、**ナブラ**とも呼ばれる。

また、 $\text{grad}f = \nabla f$ である。

∇ に関して以下の関係が成り立つ。

c_1, c_2 を任意定数、 f_1, f_2, f を任意のスカラー場とする。

$$\nabla(c_1 f_1 + c_2 f_2) = c_1 \nabla f_1 + c_2 \nabla f_2$$

$$\nabla(f_1 f_2) = f_1 \nabla f_2 + f_2 \nabla f_1$$

$$\nabla f = 0 \quad \Rightarrow \quad f = \text{const.}$$

ベクトル場の発散①

(x, y, z) の直交座標系において、ベクトル場 \mathbf{A} (A_x, A_y, A_z)があるととする。

$$\operatorname{div}\mathbf{A} = \frac{\partial A_x}{\partial x} + \frac{\partial A_y}{\partial y} + \frac{\partial A_z}{\partial z}$$

これを \mathbf{A} の**発散**と呼ぶ。

また、Hamilton演算子と \mathbf{A} の内積を取ると、

$$\begin{aligned}\nabla \cdot \mathbf{A} &= \left(\mathbf{i} \frac{\partial}{\partial x} + \mathbf{j} \frac{\partial}{\partial y} + \mathbf{k} \frac{\partial}{\partial z} \right) (A_x \mathbf{i} + A_y \mathbf{j} + A_z \mathbf{k}) \\ &= \frac{\partial A_x}{\partial x} + \frac{\partial A_y}{\partial y} + \frac{\partial A_z}{\partial z}\end{aligned}$$

$$\operatorname{div}\mathbf{A} = \nabla \cdot \mathbf{A}$$

ベクトル場の発散②

発散に関して以下の関係が成り立つ。

なお、 A 、 B は任意のベクトル場、 f は任意のスカラー場とする。

$$\nabla \cdot (\mathbf{A} + \mathbf{B}) = \nabla \cdot \mathbf{A} + \nabla \cdot \mathbf{B}$$

$$\nabla \cdot (f\mathbf{A}) = f(\nabla \cdot \mathbf{A}) + \mathbf{A} \cdot (\nabla f)$$

Laplaceの演算子(ラプラシアン)①

ベクトルAがスカラー場fの勾配に等しいとき、

$$A = \text{grad}f = \nabla f \quad ※ fをAの**スカラーポテンシャル**と言う$$

このときdivAは、

$$\begin{aligned} \text{div}A &= \text{div}(\text{grad}f) = \nabla \cdot \nabla f \\ &= \frac{\partial^2 f}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 f}{\partial y^2} + \frac{\partial^2 f}{\partial z^2} \end{aligned}$$

ここで $\nabla \cdot \nabla$ に対応する演算子 ∇^2 を設定する。

$$\nabla^2 = \frac{\partial^2}{\partial x^2} + \frac{\partial^2}{\partial y^2} + \frac{\partial^2}{\partial z^2}$$

これを**Laplaceの演算子**、あるいは**ラプラシアン**と言う。

Laplaceの演算子(ラプラシアン)②

$$\operatorname{div}(\operatorname{grad} f) = \nabla^2 f$$

演算子 ∇^2 は Δ と書いたりする。

ベクトル場の回転

ベクトル場Aの**回転**は $\text{rot}A$ 、あるいは $\text{curl}A$ と書く。

$$\text{rot}A = \left(\frac{\partial A_z}{\partial y} - \frac{\partial A_y}{\partial z} \right) \mathbf{i} + \left(\frac{\partial A_x}{\partial z} - \frac{\partial A_z}{\partial x} \right) \mathbf{j} + \left(\frac{\partial A_y}{\partial x} - \frac{\partial A_x}{\partial y} \right) \mathbf{k}$$

また $\text{rot}A$ は、

$$\text{rot}A = \begin{vmatrix} \mathbf{i} & \mathbf{j} & \mathbf{k} \\ \frac{\partial}{\partial x} & \frac{\partial}{\partial y} & \frac{\partial}{\partial z} \\ A_x & A_y & A_z \end{vmatrix}$$

なので、 $\text{rot}A$ を $\nabla \times A$ という形式で書かれる

grad、div、rotに関する主な公式

$$\text{rot}(\text{grad}f) = \mathbf{0}$$

$$\text{div}(\text{rot}\mathbf{A}) = 0$$

$$\text{rot}(\text{rot}\mathbf{A}) = \nabla(\nabla \cdot \mathbf{A}) - \nabla^2 \mathbf{A}$$

$$\text{div}(\mathbf{A} \times \mathbf{B}) = \mathbf{B} \cdot \text{rot}\mathbf{A} - \mathbf{A} \cdot \text{rot}\mathbf{B}$$

$$\text{grad}(\mathbf{A} \cdot \mathbf{B}) = (\mathbf{A} \cdot \nabla)\mathbf{B} + (\mathbf{B} \cdot \nabla)\mathbf{A} + \mathbf{A} \times \text{rot}\mathbf{B} + \mathbf{B} \times \text{rot}\mathbf{A}$$

$$\text{rot}(\mathbf{A} \times \mathbf{B}) = (\mathbf{B} \cdot \nabla)\mathbf{A} - (\mathbf{A} \cdot \nabla)\mathbf{B} + \mathbf{A} \text{div}\mathbf{B} - \mathbf{B} \text{div}\mathbf{A}$$

他にも色々な公式があります・・・

おわりに

本講義では、数値流体力学輪講の準備のため、ベクトル解析の概要を振り返りました。

ベクトル解析のもう少し突っ込んだ話と、流体力学に最低限必要なテンソル解析の話題提供します。

ご清聴ありがとうございました